

## 三春城跡第 10 次調査

# 二の丸跡試掘調査現地説明会資料

### 1 調査の概要

教育委員会では、町の歴史のシンボルである町指定史跡「三春城趾」について、国史跡指定を目指すために詳しい内容や変遷を明らかにするための調査を、文化庁の支援を受けて今年度から実施しています。今年度は、城跡全体の詳細な地形図の作成と、江戸時代に二の丸と呼ばれた地区の試掘調査を行っています。

### 2 三春城の歴史概要

三春城は、永正元年（1504）に田村義顕が築城したと伝わり、天正 18 年（1590）に奥羽仕置で田村家が改易されると、会津藩蒲生家の支城、江戸時代前期の加藤・松下氏の居城を経て、正保 2 年（1645）から明治維新まで三春藩秋田家の居城として使用されました。戦国時代は、山上に城主が暮らし、周囲の大きな平場（曲輪）に一族や重臣が暮らす構造の山城だったと推測されます。近世になると、蒲生氏や松下氏らにより、大きな石垣や櫓などが築かれ、秋田氏の時代になると、藩主が暮らす御殿を麓（現在の三春小学校校庭）に移し、天明の大火（1785 年）で城の大部分を焼失しました。明治維新後は、城の建築物をはじめ、石垣や礎石にいたるまで、解体売却されました。二の丸地区については、民間に払い下げられ畑等として利用された後、昭和 30 年代前半に町有地となり、昭和 44 年度に城山児童遊園地が建設され、昭和末年頃に散策路が整備されました。

### 3 城山の地質

三春城跡が所在する城山は、周囲の山が標高 350m 前後の三春町内では、407m と頭一つ飛び出しています。この辺りの 350m 前後の山は、地中深くでマグマがゆっくり冷却されて形成された深成岩である花こう岩（御影石等）が、隆起して形成されたと考えられています。これに対して城山は、花こう岩層の上に白河層と呼ばれる地層が形成されています。白河層は、花こう岩の上に砂や礫（川原石）が堆積した層（下部）の上に、火山の噴出物が降下堆積して、その熱と重量で固まった石英安山岩質溶結凝灰岩（上部）が堆積しています。三春城本丸跡周囲に見られる岩の露頭がこの凝灰岩で、縦横に節理（亀裂）が入りやすいことから垂直に崩れやすく、それが城の切岸となり、さらに石垣の石材として利用されました。

### 4 発見された遺構

調査区東側の上段部は、10 ～ 20 cm 程度の表土下全面で砂・シルト・粘土層の互層が表れます。これが白河層下層と推定されることから、児童遊園地整備時に削平され、中世から近世の遺跡は失われていると考えられます。そして、西側の下段も 50 ～ 150 cm ほどの厚い近現代の盛土層の下から、花こう岩層が全面で確認されることから、同様に削平されていると考えられます。この地盤層上面で数基のピットを検出しましたが、性格は不明です。また、下段の東壁では花こう岩を垂直に削り出した部分が確認され、石垣の一部として利用されたと推測され、そこから 2m ほど外側で検出された溝跡は、堀底道として利用された可能性があります。このほかに、二の丸の外縁となる北側通路南の土手には、道側に面を整形した自然の岩あるいは移設した大きな石がいくつか発見され、石垣の一部と考えられます。さらに、南東角附近でも、曲輪の外側へ向けて面を作り出した岩があり、そこへ近代と推定される小さな矢穴があげられていることから、明治維新後に石材として取り出そうとして失敗した痕と考えられます。

### 5 出土遺物

今回の調査では近現代の陶磁器やガラス瓶、鉄釘などが多数出土し、江戸時代後期の大堀相馬焼などの陶磁器片のほか、美濃産の播鉢（16 世紀）や乾隆通宝（清朝銭）、大型の動物骨も出土しています。

### 6 まとめ

今回の調査で、二の丸地区の平場は公園整備の工事で、遺跡の多くが失われていることがわかりました。これに対して、平場周辺には明治維新後の解体をまぬがれた一部の石垣が残っていることもわかりました。発見された石垣は、本丸東辺に残る大型の石を貼り付けた石垣と似ており、同じ頃の築かれた可能性があります。今後は、調査成果を整理するとともに、城跡のあちこちに残る石垣や三の丸などの調査を進める予定です。



上段：貞享三年（1686）  
三春城絵図（左：是迄の図、  
右：此度改め候図）  
中段：上図の二の丸部分  
下段：三春城起こし絵図（二  
の丸部分）

二の丸は、蒲生氏らが整備しましたが、秋田氏が入部した頃には荒れており、管理しやすいように改修したようです。北側から入って西から、あるいはさらに回り込んで南東から出入りしていた時期もあるようです。江戸時代は建物はなく、あまり使われなかった曲輪と考えられます。また、西側の下段を描く図と描かない図があり、その性格は不明です。